

# 京都府中小企業技術センター協力会「M&T交流会」

京都府中小企業技術センター協力会は、会員相互の交流と情報交換の場として、毎年開催している「M&T交流会」を8月24日(火)に京都府産業支援センターにおいて、「セミナー」と「交流会」を、協力会会員以外にも参加を呼びかけて開催しました。今回は、ドイツ在住のジャーナリスト高松平藏 氏をお迎えし、「ドイツの地方都市はなぜ元気なのか～地域イノベーターとしての企業～」をテーマにご講演いただきました。



## 高松 平藏 氏 講師プロフィール

ドイツの地方都市エアランゲン市(バイエルン州)在住。1996年創業の京都経済新聞社の立ち上げに参画。1998年からエアランゲン市での取材を開始する。いったん日本に帰国するが、2002年から再び同市に。これまでの取材分野は環境問題、IT、文化・芸術、経済など多岐にわたるが、いずれもエアランゲンおよび周辺地域で取材。日独の生活習慣や社会システムの比較をベースに地域社会のビジョンをさぐるような視点で執筆している。著書に『ドイツの地方都市はなぜ元気なのか』(学芸出版 2008年)、『エコライフ ドイツと日本どう違う』(化学同人/妻・アンドレアとの共著 2003年)がある。

## イノベーションとは何か

本日はイノベーションについてお話をさせていただきます。通常イノベーションという言葉を見ると、技術革新といった技術的なものを想像しますが、実は「新しいもの」、「新機軸」のことです。都市の維持・発展には大小のイノベーションが不可欠ですが、そのためには、「経済的強さ」、「生活の質を高める」、「都市の存在感の向上」といったことが必要となります。とりわけ都市のイノベーションの苗床として「雰囲気よさ」が大切です。私が拠点にしているエアランゲン市(バイエルン州)の例をあげて、地域イノベーターとしての企業の役割を考えたいと思います。

## 都市の中での「雰囲気よさ」はどのように作られるのか

エアランゲン市は人口10万人。京都市でいえば中京区ぐらいの人口規模ですが、文化や環境問題でも活発な動きのある大学町です。ハイテク、とりわけ医療分野に強く、「医療都市」として近年展開。そのビジョンを文化政策的な手法で展開しているのがドイツらしいところです。これを後押しするイベントに近隣都市と共同で行う「科学の夜長」というものがありますが、企業、大学、研究所の門戸を一齐に開けて、「自分たちの町の中にはこんな科学資源がある」と可視化する機能があります。

NPOも重要です。NPOは社会的活動を行う専門家集団という側面があり、ビジョンや課題を提示し、行政、金融、政治との接着剤としての役割を果たすことがあります。メディアの役割も大きいです。全国紙中心の日本に対してドイツは郷土紙クラスの新聞が中心。「これ、どうなってんねん」といった「町のつっこみ役」を担当する形です。さらに着目すべきは「読者=町の人」という点。読者は意見などを新聞に投稿します。つまり町について公の言葉で意見を述べるわけで、新聞は町で起こった問題を公の議論に持って行く装置にもなっています。

このように文化、NPO、新聞といったものが町の中でのコミュニケーションを誘発し、ビジョンを共有。「町の運営」について創意工夫やアイデアが出てきやすい雰囲気ができてくるといえます。

## ドイツの中小企業は何をしているのか

そんな町で中小企業は何をしているのでしょうか。まず、地域経済発展を担っています。例えばインフォチーム社(写真1)は社員数50人程のソフトウェアの会社ですが、地域内で新たな産業クラスターを生成するリーダーとしても活躍しています。次に「オープンドア」の実施があります。企業や公共施設を公開する「科学の夜長」の単発版です。ウェーブライト社(写真2)の場合はレーザーを使って茄子の皮を焼く体験などができるようにしています。これによって地元での存在



写真1 インフォチーム社



写真2 ウェーブライト社のオープンドア

感向上と地元との関係づくりにも貢献。コミュニケーションやマーケティング、企業の説明責任や社員のモチベーション向上にも役立っています。また、「スポンサリング」も重要です。例えば地方の文学作家の写真集作りイベントの自動車販売会社ピッケルがスポンサーになっています。EUの中でも成長の著しいパン製造会社であるデア・ベック社(写真3)はパンの袋にアーティストの作品を載せるといったこともしています。面白いのがスポンサリングの理由。多くの経営者は「拠点地域へのお返し」「地域の生活の質の向上」と答えます。その背景には社会貢献の「社会」とは拠点の社会を指し、地元社会を闊達にすることが企業の経営環境のよさにもつながるという考えがあります。このような企業と地域との関係性の強さも町のイノベーションにつながるといえるでしょう。



写真3 デア・ベック社のパン袋

## イノベーションのための提案

最後に、イノベーションの「雰囲気づくり」の苗床づくりとして、先端的な芸術に財を投じてみてはどうかと提案したいと思います。先端芸術とは「何だこりゃ」という、理解が難しいもの。いわば「先端的性」「実験性」が形になったもので、既存の価値観とは異なるものが表現されています。これを活用しているのが世界で40万人以上の社員を抱えるドイツの巨大企業、シーメンス社。同社には先端芸術を執り行う部署がありますが、社内にイノベティブな雰囲気を作り、先端的なものに挑戦する姿勢を生み出すことが目的です。

翻って日本は少子高齢化・成熟社会が進行しています。そんな中、地域社会で先端芸術を盛んにすることで、イノベティブな雰囲気を作り出し、同時に企業経営にもよい影響を与えるのではないのでしょうか。

【お問い合わせ先】

京都府中小企業技術センター  
企画連携課 情報・デザイン担当

TEL:075-315-9506 FAX:075-315-9497  
E-mail:design@mtc.pref.kyoto.lg.jp